

2021年11月8日

第42回大会は2021年9月25日～10月8日にWeb開催され、絵本部会は9月26日に「グローバルズムを育む絵本」というテーマで2時間のワークショップを、Ⅰ 問題提起（宮地敏子）、Ⅱ 実践報告（石川 由美子、上村 瑞枝、松田 ミカ、何 偉、成田 望・松本 由美）、Ⅲ まとめないまとめ（山岡 テイ、山田 千明）、Ⅳ おわりにかえて（松本 由美）の4部構成で実施しました。

Ⅰの問題提起では、幼児が自他共に尊重し協働して、より善い社会に変えていく力を育むにはどうしたらよいか、絵本という一つの文化の場で「学んで変わる」という観点から考察がなされました。海外で育つ日本のこどもたち向きの絵本の選書に長年携わる発表者が手に持って紹介されたのが『あおくんときいろちゃん』、黄とも青ともちがう「緑」に成る体験の意味を参加者と共有しつつ、「多様という普遍」「命の尊重（ものがたり）」「知識の広がり（科学）」「知恵の育ち（昔話）」「絵本を読み合う絵本文化の持続と多文化共生」と5つに整理されたブックリストが提示され、それぞれの絵本の特徴や背景が語られました。

Ⅱの実践報告では、発表者から1冊ずつ絵本が紹介され、その絵本を通じた活動実践の様子が生き生きと説明されました。『リリィのさんぽ』の同じ空間にいても異なる対象に出会い異なる体験をしているというインパクトのある発想、そして発表者が体験された絵本の読み語りの日米比較、さらには地域での絵本を通じた活動、中国の『溪边的孩子(ストリームの子ども)』の迫力のある「絵」や現代のこどもへの伝統の継承、『おかあさん』の親子のかかわり形成における絵本の力、『あたし、メラハファがほしいな』の普段意識されにくい文化や宗教観、『とんとんとん』の特別な配慮を必要とするこどもと絵本のかかわり等々についての語りと質疑応答から抽出されたのは、多様性の尊重、豊かに過ごすこども時代、自由な想像力です。これらは、自己の客体化と肯定的自己像の形成、知識・知恵の獲得、感性・能力の醸成につながるものだと考えられます。

Ⅲでは、『いろいろ いろいろな かぞくのほん』『りんごかもしれない』が取り上げられ、家族の様々なあり方の側面から、そして「～かもしれない」と考えることを楽しむ側面から、多文化共生へのアプローチがなされました。「翻訳絵本」の存在は、地球上の人類皆で共有できる媒体として絵本を楽しむことを可能にするものではありませんが、忘れてはならないのは、21世紀のこの地球上には「絵本」というこども文化を享受できないこどもも存在するという現実です。

Ⅳについて時間的に余裕はなかったのですが、本ワークショップを通して『まあちゃんのながいかみ』で表現されている、個と個、家庭と家庭、地域と地域といった同心円同士の交わり、目にはみえないぬくもりという松本会員の想いが通奏低音のように響いていたことが再認識されました。

出版社に絵本の表紙掲載の許諾申請をすることに始まり、中国からのご発表とその通訳、リハーサルの打合せ、多言語対応をはじめとする本番の運営等、多くの方々のご協力のお蔭で、「絵本の話がたっぷり聞けた」「幼児教育者は、絵本が好きなんだと改めてわかった」「早速、気になる絵本を買って帰った」等のお言葉を参加者の皆様から頂戴し、なんとか実り多いワークショップとなったのではないかと思います。なお、ここで取り上げた絵本のあらすじ等は絵本部会通信13号をご参照ください。（山田 千明 記）